

# ポスターセッション

3月3日（日）

【ポスター掲示時間】 11:00–14:30

【ポスターセッションコアタイム】 12:00–13:30

【会 場】 敬学館 2階 KG201～KG206教室

※各ポスターの教室配置は次ページの「ポスター発表ブース案内」をご覧ください。

FDに関する情報収集、参加者間の交流を目的として、ポスターセッションが行われました。大学コンソーシアム京都加盟大学・短期大学の教員・職員・学生が、所属大学の特徴的なFDの取り組みを発表しました。



# ポスター発表テーマ一覧

No.	テーマ	
1	京都外国語大学・ 京都外国語短期大学	学習記録手帳と振り返りによる自律学習支援システムの構築
2	京都華頂大学・ 華頂短期大学	京都華頂大学・華頂短期大学学生を対象とした調査からみえる初年次教育の課題
3	京都教育大学	表現活動を通じた総合的な保育実践力の育成プログラム作成の試み
4	京都光華女子大学	保育者養成校における地域子育て支援事業実施と学生の学び
5	京都産業大学	学生ファシリテータの経験から生まれたもの ～社会人生活にどのように役立っているか～
6	京都産業大学	知・ことば・人を結ぶ「グローバルcommons」 ～京都産業大学グローバルcommonsの運営と学生スタッフの役割～
7	京都女子大学	環境に配慮した繊維や衣類のアップサイクル・リサイクルの啓発活動
8	京都府立大学	地域特性(産業構造・地域ニーズ)を考慮した授業デザインと成果 ～京都と熊本それぞれの地域特性に合わせた授業とその成果～
9	京都薬科大学	ICTを活用した実験実習における学習支援の取り組み
10	成安造形大学	授業初回における学生の「教員選択行動」が大学生の受講姿勢に与える影響 —成安造形大学複数教員の並列開講型講義の事例から—
11	成安造形大学	キャリア意識の向上を意図したオンライン高大連携 —大学生が高校生に Zoom でオンラインインタビュー—
12	同志社女子大学	北海道富良野市における地域連携型学習を通じたまちづくりの視点
13	立命館大学	課外自主活動でリーダーを担う学生の社会情動スキル ～実態把握および課外活動における困りごととの関連の探索的検討～
14	立命館大学	多文化間共修 Cross Cultural Encounters の教育実践 —他者との出会いから創造する学び、二言語アプローチの意義
15	立命館大学	国際系ピア・サポーターによる実践とコミュニティ形成:多様な学びの 環境と繋がり構築へ向けて
16	龍谷大学	Community Based Learning による成果と課題 —学生と地域の変化に着目して—
17	大学コンソーシアム京都	生涯学習事業「京(みやこ)カレッジ」の紹介 ～京都学講座・大学リレー講座を中心に～

# 1. 京都外国語大学・京都外国語短期大学

テーマ	学習記録手帳と振り返りによる自律学習支援システムの構築	
発表代表者	河野 弘美: 京都外国語短期大学 キャリア英語科 准教授	
連名発表者	谷村 緑: 京都外国語大学 外国語学部 准教授	
キーワード	自律学習	外国語学習
	学習記録手帳	短期大学生
発表の概要	<p>京都外国語大学・京都外国語短期大学では、自律的な学習者の育成を目標としている。学生の自律学習には教員の関わりが不可欠であることが指摘されており (Vieira, 2000; Aoki, 2000; Benson2010)、2015 年に自律学習に関する学内研究グループを立ち上げ、支援の一助として学習記録手帳の作成・使用・改善をおこない、2018 年度には短期大学生に特化した学習記録手帳を作成した。本ポスター発表では、短期大学生向け学習記録手帳の使用方法和学習支援またその効果について報告する。調査対象者は短期大学生1年生22名である。対象学生には1年を通して、長期・中期・短期の学習目標と学習事項を毎週記録させた。また、対象学生と教員は毎週学習状況を確認し振り返りとフィードバックのコメントを記入した。さらに、学習動機の変化を調査するため事前、事後にアンケートを行った。本発表では学習記録手帳を用いた自律学習における変化を量的質的に分析し、その結果を紹介する。</p>	

## 学習記録手帳と振り返りによる自律学習支援システムの構築

河野弘美\* 谷村緑\*\*  
\*京都外国語短期大学キャリア英語科 \*\*京都外国語大学外国語学部

---

**背景と目的**

2015年に京都外国語短期大学・京都外国語大学で学習の学内研究グループを立ち上げ外国語学習の自律的な学習者育成を目的とし学習記録手帳の作成を開始、2018年より短期大学生に特化した学習記録手帳の作成を研究グループのうち2名で開始(学内研究グループの他2名は大学生に特化した学習記録手帳の作成研究へ)

- 2015年より学習習慣に関する事前調査と学習記録帳作成、使用者へのヒアリング実施
- 2015年: 学習記録手帳「Weekly Learning Log」、2016年: 「My Learning Workbook and Tracker」作成、利用調査実施
- 2017年: 学習記録手帳「My Language Learning」作成、利用調査実施 (2017年9月下旬~2018年1月下旬)
- 2018年: 学習記録シート「Independent Study Plan」作成、利用調査実施(2018年4月~7月下旬)、学習記録手帳「Independent Study Book」作成、利用調査実施(2018年10月~2019年1月中旬)

本発表では、自律的な学習者のケーススタディとして短大1年生の「Independent Study Book」利用実施の結果を紹介・外国語学習に限らず学習全般に関しての自律的学習への効果について

---

調査手順	学習記録手帳の調査対象と方法	備え置いた英語のメタファー15種類と関連イラストをかつ掲載
<p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事前アンケート実施</li> <li>TOEIC試験実施</li> </ul>	<p><b>調査期間と対象授業</b></p> <p>2018年4月~2019年1月 週1回(100分授業)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>必修リーディング科目</li> <li>評価の10%(秋学期)</li> </ul> <p><b>教材</b></p> <p>短期大学生用のオリジナルの</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自律学習記録シート</li> <li>自律学習記録帳(愛称「Future Book」)イラスト@mincon soft</li> </ul>	
<p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事中アンケート実施</li> <li>TOEIC試験実施</li> </ul>	<p><b>対象学生</b></p> <p>京都外国語短期大学 キャリア英語科 1年生 1クラス22名 (Middle, Low)</p>	
<p>1月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事後アンケート実施</li> <li>TOEIC試験実施</li> <li>記述アンケート実施</li> </ul>	<p><b>分析方法・手順</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>自己管理能力に関する事後アンケート結果から上位群と下位群に分類</li> <li>各群の事前、事中、事後アンケート結果 (1. そう思わない~5. そう思う)と TOEIC Scoreの伸びを一元配置の分散分析及びTukey HSDを使用して分析</li> </ol>	

---

授業方法: 春学期	事前、時中、事後アンケート結果	TOEIC SCOREの結果
<ul style="list-style-type: none"> <li>1~6週目授業内に自律学習記録シートを記入提出</li> <li>担当教員からのフィードバック</li> <li>14週目に振り返り記入提出</li> <li>自律学習記録シート記入は評価対象外</li> </ul>	<p><b>自己管理能力の変化(上位群)</b></p> <p>4月 vs 1月 Tukey HSD p = 0.028299 *</p>	<p><b>TOEIC SCOREの変化</b></p> <p>4月 vs 7月 Tukey HSD p = 0.022601 ** 4月 vs 1月 Tukey HSD p = 0.01092 *</p>
<p><b>授業方法: 秋学期</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>短期大学2年間のスケジュール計画</li> <li>学期末までの目標、卒業までの目標を立てる</li> <li>前の週に実施した学習記録を付け授業に持ち参</li> <li>授業内10分程度で自己の学習実施状況の振り返りを記入→授業内提出</li> <li>担当教員から毎週フィードバック→授業内返却</li> <li>学生同士による学習実施状況へのフィードバック(口頭及び記述)</li> <li>9~13週目に自律学習支援室の利用必修</li> <li>学期中盤より実施した担当教員とのチューリアルで使用</li> </ul>	<p><b>自己管理能力の変化(下位群)</b></p> <p>4月 vs 1月 Tukey HSD p = 0.045249 *</p>	<p><b>記述アンケート結果:</b></p> <p>「改めて自分の情報の使い方を考えさせられた」、「自分の出来事、出来方から授業で得た知識」、「授業の自分の学習状況から自分の目標を見直せた」、「(学習)領域向上」「計画は学習する物になった」、「書く事で自分の情報が整理された感じがしていい印象である」、「目標とか(Future Book)を書けばモチベーションが上がった」、「少しづつ書いていけば自分の目標も具体化ができた」、「材料の学習を自分のペースで進めたいから自分から進めたい」、「他人からのフィードバックが役に立った感じがしたから自分も積極的に進めたい感じがした」、「進捗が分かるからFuture Bookの方が良い感じがする事が多かった」、「自分の学習記録シートが良かった」、「(学習)記録シートの方が整理しやすかった」</p>

## 2. 京都華頂大学・華頂短期大学

テーマ	京都華頂大学・華頂短期大学学生を対象とした調査からみえる初年次教育の課題	
発表代表者	浅田 瞳：京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター 主事	
連名発表者	高岡 理恵：京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター長 松尾 章子：京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター 専任研究員 塩田 二三子：京都華頂大学・華頂短期大学 教育開発センター 専任研究員	
キーワード	初年次教育	大学教育
発表の概要	京都華頂大学・華頂短期大学教育開発センターでは2017年度末に本学学生固有の初年次教育の課題を明らかにするため、大学および短期大学全1回生を対象とした大学生活に関するアンケート調査を行った。 学生が1年間の大学生活を終え、自分の関わりのある項目(休講、補講、ポータルサイトなど)は認知度が高い一方、数値が低い項目(シラバス、GPA、研修日など)も見られた。そのうえで、本学学生のどのようなところに課題があるのか、調査結果について報告し、高大接続の重要性を含めて検討を図り、本学の初年次教育のあり方について報告を行う。	

### 京都華頂大学・華頂短期大学学生を対象とした調査からみえる初年次教育の課題

○浅田 瞳(華頂短期大学 准教授 教育開発センター 主事)  
高岡 理恵(華頂短期大学 准教授 教育開発センター センター長)  
○松尾 章子(華頂短期大学 准教授 教育開発センター 専任研究員)  
塩田 二三子(京都華頂大学 准教授 教育開発センター 専任研究員)

**1. 本発表の目的と方法**

**1-1 研究の目的**  
大学のユニバーサル化が指摘され、本学のような小規模の大学では、多様な背景をもつ学生が入学している。以前より指摘されていた高校生から大学生への移行を促す初年次教育はますます重要性が高まっているといえる。  
本研究では、本学の1回生に必要な初年次教育の知見を提供し、本学の初年次教育の現状と課題を明らかにすることを目的としている。

**1-2 研究の方法**  
2017年度の本学全1回生(大学・短大すべて)を対象に大学生活に必要な用語やキーワード31項目をセンター研究員4名(浅田、高岡、松尾、塩田)で抽出し、それらの項目について「説明できるか」を問う質問紙調査を実施した。

**2. 調査の概要**

**調査対象**  
【四年制大学】  
2017年度1回生計104名  
(アンケート回収は現代家政53名、食物栄養47名の計90名)  
【短期大学】  
2017年度1回生計211名  
(アンケート回収は歴史25名、幼児教育168名の計193名)  
【調査日時】2018年1月(秋学期終了時期)

**調査方法** 集合調査。1回生の各学科の授業を担当する教員に調査を個別に依頼し、授業終了後学生にアンケートを配布。  
**アンケート内容** 学生が大学生活を送るうえで知っておくべきと考えられる語句かつ大学で初めて耳にするであろう用語について教育開発センター研究員で意見を出し合い、31項目を選出した。

**図1 初年次教育必須項目**

**図2 学生の情報伝達に関する項目**

**図3 学習環境・学修支援のあり方に関する項目**

**図4 インターンシップおよびその他に関する項目**

一方で、「シラバス」(78.2%)、「単位」(78.5%)、「到達目標」(28.7%)、「演習と講義」(22.2%)などのシラバスや学習形態に設置する項目についてはばらつきがみられた。学科間の差異が際立つ項目としては、「演習と講義」(食物栄養実習57.4%、全体平均22.2%)、「プレゼンテーション」(食物栄養実習80.9%、全体平均34.1%)、「到達目標」(歴史4.0%、全体平均28.7%)などがあげられる。

図2の学生の情報伝達に関する項目については、ネット環境下で閲覧可能な「ポータルサイト」については、どの学科であっても説明できる割合が高いが、従来の大学での学生通知の手段として用いられていた「掲示板」については、現代家政学科(81.1%)のようにポータルサイトと大きな数値の差がみられない学科もあれば、歴史学科(56.0%)のようにポータルサイトと比べて20%以上も差のつく学科も見られた。

図3の学習環境・学修支援の項目を見ると、オフィス・アワーについては全体の8割以上の学生がその意義を認知してはなかった。しかし、ほとんどの学生は何か質問等があればオフィス・アワーと関係なく研究室を訪ねており、オフィス・アワーの認知度と教員との密接さは温度差があるように感じられ、本学の特徴とも指摘できる。

図4においても各学科間の温度差があったのはインターンシップであり、歴史学科では88.0%の学生が「説明できる」と回答しているのに対し、その他の学科は、幼児教育42.5%、食物栄養49.3%、現代家政26.4%であり、全学で取り組むべき必要性があるのではないかと考えられる。

**4. まとめにかえて**  
本調査は1回生の1月に調査を行ったにもかかわらず、その認知度には科目や学科によって大きな差がみられた。今回の語句のほとんどは入学直後のガイダンス説明されている。しかし、本学の入学ガイダンスは目に集約されており、学生にその場で理解するのは無理がある。「シラバス」や「単位」は高い強率で認知はされていたが、その本来の意味まで理解しているかという点に疑問が残る。  
本研究では、高等教育のユニバーサル化による多様な学生への対応として、初年次教育が重要であるかを改めて認識する結果となった。また今回、学科間でばらつきが見られたことから、初年次教育において必要な内容がすべての学生に同様に伝わるようにするために、教育開発センターでは「手引」の作成を進めている。



### 3. 京都教育大学

テーマ	表現活動を通した総合的な保育実践力の育成プログラム作成の試み	
発表代表者	平井 恭子: 京都教育大学 教育学部幼児教育科 教授	
連名発表者	東村 知子: 京都教育大学 教育学部幼児教育科 准教授 古賀 松香: 京都教育大学 教育学部幼児教育科 准教授	
キーワード	表現活動	保育実践力
	育成プログラム	幼児教育専攻学生
発表の概要	<p>本学幼児教育科では、学生の総合的な保育実践力を育てるために、人形劇や絵本の読み聞かせ、ミュージカルなどの表現活動を中心とする4年間のプログラムを作り上げてきた。本発表では、プログラムの概要と学生の学びについてまとめ、その意義と今後の課題について考察する。本プログラムの意義は、4年間で学生が多様な活動を経験でき、活動への参加のレベルが段階的に深まるようになってきていること、どの活動もすべての表現分野を含んでいること、表現活動はすべて学内外の機関や学内行事、地域との連携のもとで行われているため、乳幼児から地域住民まで幅広い観客の前で演じる経験を積むことができ、結果として本学と教育現場や地域社会との結びつきを生み出し強化するものとなっていることである。</p>	

#### 表現活動を通した総合的な保育実践力の育成プログラム作成の試み

平井恭子(京都教育大学)、東村知子(京都教育大学)、古賀松香(京都教育大学)

**はじめに**

保育者に求められる専門性の一つ、表現力。幼児教育科では総合的な保育実践力を育てるため、授業で学んだ表現分野(音楽、身体、言語、造形など)に関する知識や技術を、乳幼児と保護者、児童および地域住民の前で発揮できる実践の機会を作り出してきた。本研究では、大学生活4年間のプログラムの意義と今後の課題について考察する。

**活動の種類とプログラムの流れ** 学内外との連携

附属図書館との連携→「うたとおはなしの会」「えほんのもり」

大学の行事(オープンキャンパス、卒業式、入学式) 行儀と連統→人形イベントに出演

附属学校園と交流: PTAと共催でミュージカルや人形劇の上演、児童との交流

地域の保育所・幼稚園との連携→保育所のクリスマス会に出演、など

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次	入学式											
2年次												
3年次												
4年次												

**学生の学び**

人形劇でお話を楽しく伝える工夫  
人形劇ならではの演出、入場の際に登場人物の気持をいかに表現できるか?

「うたとおはなしの会」

「えほんのもり」(附属図書館にて)

3歳未満の子どもにはどんな絵本が適しているか? 子どもを引きつける方法は?

地域の学校で

地域の保育所で

附属幼稚園で

MUSICALやダンスの上演を通して、何を伝えるか? 全体の構成、音楽や劇の効果的な使い方、幼児にも分かりやすい演出、大道具・小道具の製作

音楽を合わせ、身体を動かす楽しさを体験

**育成プログラムの意義**

- 正統的周辺参加(周辺的役割から中心的役割へ)
  - 1回生→4回生のサポートをしながら「うたとおはなしの会」全体を運営
  - 2回生→1回生の指導をしながら「うたとおはなしの会」全体を運営
- すべての表現分野を総合的に学習
  - 歌や楽器などの音楽表現、手遊びやダンスなどの身体表現、絵本の読み聞かせやお話などへの語り掛けなどの言語表現、ポスター製作や土産、大道具・小道具作りなどの造形表現など
- 子どもたちからの反応
  - ⇒表現技術UPへ

**今後の課題**

- 経験を忘れさせない工夫(現在は2回生の専任が担任)
- ゼミの枠を超え、関心のある学生が取り組める仕組みの導入(一次行事「うたとおはなしの会」は専任教員が中心)
- 専科教員主導の取り組みを学生主体の活動にする、体制作り

#### 4. 京都光華女子大学

テーマ	保育者養成校における地域子育て支援事業実施と学生の学び	
発表代表者	和田 幸子: 京都光華女子大学 こども教育学科 准教授	
連名発表者	伊藤 美加: 京都光華女子大学 こども教育学科 教授 下口 美帆: 京都光華女子大学 こども教育学科 准教授 田中 慈子: 京都光華女子大学 こども教育学科 講師 智原 江美: 京都光華女子大学 こども教育学科 教授 永本 多紀子: 京都光華女子大学 こども教育学科 准教授 松本 しのぶ: 京都光華女子大学 こども教育学科 講師 山崎 玲奈: 京都光華女子大学 こども教育学科 講師	
キーワード	保育者養成	子育て支援事業
	授業	連携
発表の概要	<p>本学では、子育て支援事業「光華こどもひろば」の開催を続けている。2014 年度からは授業との有機的なつながりをより積極的に意図しつつ学生の参加をすすめてきた。その経緯を整理し、他校の実践も参考にしながら、保育者養成校で行う子育て支援事業の実践エッセンスを明らかにして、本学の実践の独自性と課題を提示したい。また「光華こどもひろば」に参加の親子を授業にゲストスピーカーとして招き、学生と交流する「子育て交流会」開催に至る経緯を整理し、その意義と、継続開催する仕組み作りについて提示する。それらによって本学での取り組みの特徴を抽出し、授業との往還を創り出していくための効果的な循環構築を試みる。</p>	

The poster provides a comprehensive overview of the 'Hikaru Children's Plaza' project. It details the background of the initiative, the specific goals for both the training school and the participating parents, and the methods used to facilitate these activities. A significant portion of the poster is dedicated to the 'Child-rearing Exchange Meeting', which includes a list of participating parents and their children, along with photos of the event. The poster also outlines the project's history and future plans, emphasizing the importance of creating a sustainable cycle of support and learning.

## 5. 京都産業大学

テーマ	学生ファシリテータの経験から生まれたもの ～社会人生活にどのように役立っているか～	
発表代表者	長田 早智: 京都産業大学 文化学部 2 年次生	
連名発表者	若林 みお: 京都産業大学 文化学部 2 年次生 上田 貴大: 京都産業大学 経営学部 3 年次生 清水 菜未: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務局 F 工房 コーディネータ 鈴木 陵: 京都産業大学 教育支援研究開発センター事務局 F 工房 コーディネータ	
キーワード	社会人	学生ファシリテータ
	活動経験	個人の目的・目標
発表の概要	<p>京都産業大学では、授業等の支援を担う「学生ファシリテータ」というボランティアスタッフが活動し、主に初年次向けキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」や、新入生を対象とした入学前オリエンテーション等を円滑に進めるための支援(サポート)を行っている。</p> <p>本学の学生ファシリテータ経験をもつ卒業生を対象に、以下の 3 点について調査を行う。</p> <p>(1)活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。 (2)活動中にどのような経験を得たか。 (3)社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。</p> <p>本発表では、この調査から、学生ファシリテータの活動経験が社会に出てどのように役立っているかを明らかにする。</p>	

### 学生ファシリテータの経験から生まれたもの ～社会人生活にどのように役立っているか～

【学生ファシリテータ】 経営学部 上田貴大(本文)  
文化学部 長田早智(写真)  
教育支援研究開発センター F 工房(協力) 清水菜未、鈴木陵

**はじめに** 京都産業大学では、授業等の支援を担う「学生ファシリテータ(以下、学ファシ)」というボランティアスタッフが活動し、主に初年次向けキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」や、新入生を対象とした入学前オリエンテーション等を円滑に進めるための支援(サポート)を行っている。本報告では、社会人になった学ファシ経験者を対象にヒアリング調査を行った。結果をもとに、学ファシ活動経験が社会に出てどのように役立っているかを明らかにする。



---

**調査概要**

**期間** 1月中旬から2月初旬の約2週間  
**目的** 学ファシ活動経験が社会に出て、どのように役立っているかを明らかにする。  
**調査対象** 学ファシ経験者の社会人(社会人一年目)  
**調査人数** 5人

**発表項目** 下記の三つ、回答は一部抜粋。

Q1 学ファシ活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。  
Q2 学ファシ活動中にどのような経験を得たか。  
Q3 社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。

---

**調査結果**

**Q1 学ファシ活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。**

Q1-1 学ファシ活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。

Q1-2 学ファシ活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。

Q1-3 学ファシ活動中にどのような個人の目的・目標を持っていたか。

**Q2 学ファシ活動中にどのような経験を得たか。**

Q2-1 学ファシ活動中にどのような経験を得たか。

Q2-2 学ファシ活動中にどのような経験を得たか。

Q2-3 学ファシ活動中にどのような経験を得たか。

---

**Q3 社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。**

Q3-1 社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。

Q3-2 社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。

Q3-3 社会人となった今、活動経験がどのように活かしているか。

**まとめ**

調査結果から、学ファシ経験のある卒業生が学ファシ活動中に持っていた目的・目標として、「学ファシに携わりたい」という目的が最も多かった。その目的は、授業等の支援を担う「学生ファシリテータ」として、初年次向けキャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」や、新入生を対象とした入学前オリエンテーション等を円滑に進めるための支援(サポート)を行うことである。また、学ファシ活動を通じて、社会人生活に役立っている経験として、コミュニケーション能力の向上、リーダーシップの発揮、チームワークの発揮などが挙げられた。また、学ファシ活動を通じて、社会人生活に役立っている経験として、社会人生活でのコミュニケーション能力の向上、リーダーシップの発揮、チームワークの発揮などが挙げられた。

ポスターセッション

376



## 6. 京都産業大学

テーマ	知・ことば・人を結ぶ「グローバルコムズ」 ～京都産業大学グローバルコムズの運営と学生スタッフの役割～
発表代表者	城崎 智香子: 京都産業大学 教育開発支援研究センター事務局
連名発表者	宗像 志保: 京都産業大学 教育開発支援研究センター事務局
キーワード	コムズ
	学生スタッフ
発表の概要	「グローバルコムズ」は、学生自身の興味・関心を基に自ら楽しみながら学ぶことができる、「知・ことば・人」を結ぶ「多言語・多文化共生空間」をコンセプトとして運営している自主学習施設である。京都産業大学で履修可能な11か国語の書籍や定期刊行物を自由に閲覧、映像・音声資料を視聴できるほか、学生スタッフによる英会話アクティビティや学習支援員による英語スタディスキルのワークショップ等のイベントを定期的で開催している。学生スタッフは留学生を含め毎年約15名が国籍・所属・学部を越えた学生同士の交流や相互理解の促進、言語学習や多文化への興味・関心を持って活動している。また、英語学習方法やライティング・プレゼンテーション等については学習支援員による個別の学習支援を行っている。 本発表ではグローバルコムズの開設より現在までの運営状況と学生スタッフの役割と成長について、現在の課題と今後の展望を示す。

### 知・ことば・人を結ぶ「グローバルコムズ」 ～京都産業大学グローバルコムズの運営と学生スタッフの役割～

城崎 智香子(京都産業大学 教育開発支援研究センター事務局) 宗像 志保(京都産業大学 教育開発支援研究センター事務局)

**発表概要 2016年グローバルコムズ(GC)開設時より現在までの運営状況と学生スタッフの役割と成長について報告する**

#### 2016年9月 学生スタッフ (Global Commons Student Staff (略称 GCS)) 稼働

GC学生スタッフ(GCS)に求める能力  
①グローバル(日・英) 英会話アプリや教材等の活用・実践が可能なこと  
②多言語の書籍や映像・音声資料を視聴できること  
③多言語の書籍や映像・音声資料を視聴できること  
④多言語の書籍や映像・音声資料を視聴できること

現在、84名(うち17名が後援機関の学生)が稼働中。  
シフト11:00-14:00 14:30-17:30 18:00-21:00  
→18:00-21:00は、11か国語(英・日・独・仏・伊・ポ・西・中・韓・葡・露・露・露)の書籍や映像・音声資料を視聴できること

学年	国籍	GCS 人数	GCS 内訳	前年度
2016年	国籍	17	7	2
2015年	国籍	17	9	2

#### GCSの役割

学生自身の興味・関心を基に自ら楽しみながら学ぶことができる「多言語・多文化共生空間」をコンセプトとして運営している自主学習施設である。京都産業大学で履修可能な11か国語の書籍や定期刊行物を自由に閲覧、映像・音声資料を視聴できるほか、学生スタッフによる英会話アクティビティや学習支援員による英語スタディスキルのワークショップ等のイベントを定期的で開催している。学生スタッフは留学生を含め毎年約15名が国籍・所属・学部を越えた学生同士の交流や相互理解の促進、言語学習や多文化への興味・関心を持って活動している。また、英語学習方法やライティング・プレゼンテーション等については学習支援員による個別の学習支援を行っている。

本発表ではグローバルコムズの開設より現在までの運営状況と学生スタッフの役割と成長について、現在の課題と今後の展望を示す。

#### 2016年4月 サギタリウス館1階グローバルコムズ開設

GCは楽しみながら学ぶ「多言語・多文化共生空間」をコンセプトとし、全学的に活用できる多言語・多文化共生空間の構築を目的とする。600坪の空間に、豊富な書籍や映像・音声資料を視聴できること。

開館時間 平日 8:45～20:00 (書籍・資料閲覧) 8:45～18:30  
土曜日 8:45～19:00 (日・英日一斉休館中 閉館)

入館者数 2016年度 約15万人(2016年1月実績) 2017年度 17,229人  
入館者数の多い9月 13:15～18:30 一日あたり400名、312人  
(9月15日は、11か国語の書籍や映像・音声資料を視聴できること)

主なスペース オープンラウンジ、読書スペース(長文60冊)、20坪のラーニングスペース(約100名)、6種類のグループ学習室、リソーススペース(書籍やDVDの取扱い)

所蔵書数 国語2万冊、多文化共生1万冊、多言語書籍約1万冊、多言語書籍約1万冊、多言語書籍約1万冊、多言語書籍約1万冊

所蔵DVD 11か国語のDVD約1,000冊、書籍、雑誌、DVDの取扱い

#### GCによる学習支援

①アクティビティ 学生自身の興味・関心を基に自ら楽しみながら学ぶことができる「多言語・多文化共生空間」をコンセプトとして運営している自主学習施設である。京都産業大学で履修可能な11か国語の書籍や定期刊行物を自由に閲覧、映像・音声資料を視聴できること。

②個別英語学習支援 英語検定や英検などの資格取得を目的とする。個別の学習支援を行う。個別の学習支援を行う。個別の学習支援を行う。個別の学習支援を行う。

Check in English Global Commons Tour

KPSA SEMINARS

377

ポ  
ス  
タ  
リ  
ウ  
ス  
シ  
ョ  
ウ

## 7. 京都女子大学

テーマ	環境に配慮した繊維や衣類のアップサイクル・リサイクルの啓発活動	
発表代表者	宮原 佑貴子:京都女子大学 生活デザイン研究所 非常勤研究員	
連名発表者	坂井 杏海:京都女子大学 家政学部生活造形学科 2 回生 上記を含め、京都女子大学生生活デザイン研究所エシカルファッション研究会所属学生(本学学生)6~7 名程度	
キーワード	エシカルファッション	リサイクル・アップサイクル
	学科を超えた学び	学生主体の正課外活動
発表の概要	京都女子大学 生活デザイン研究所 エシカルファッション研究会では、衣類や繊維のリサイクル・アップサイクルに関わる事業をおこなっている企業等と学生が、商品提案やイベントの企画を通してリサイクル・アップサイクルの意識を広める活動に取り組んでいる。現在、生活造形学科と現代社会学科の学生有志 15 名が所属しており、互いの学びの長所を活かしながら学科領域を超えた活動をおこなっている。本発表では、学生達のアイデアによる商品提案や、ワークショップなどのイベントから得た成果および、学生主体の正課外活動による効果や課題点、今後の展望について報告する。	

### 環境に配慮した 繊維や衣類のアップサイクル・リサイクルの啓発活動

京都女子大学 生活デザイン研究所 非常勤研究員 宮原佑貴子  
京都女子大学家政学部生活造形学科 2 回生 坂井杏海 他 14 名

<組織の概要>  
京都女子大学 生活デザイン研究所 では、デザイン活動を通じて、社会、地域、企業に貢献する目的のもと、学生有志による企業等との連携活動をおこなっている。当研究所で活動するエシカルファッション研究会では、衣類や繊維のリサイクル・アップサイクルに関わる事業をおこなっている企業等と学生が、商品提案やイベントの企画を通してリサイクル・アップサイクルの意識を広める活動に取り組んでいる。現在、生活造形学科と現代社会学科の学生有志 15 名が所属しており、互いの学びの長所を活かしながら学科領域を超えた活動を進めている。

<基盤となる3つの活動>

**課題発見**

京大素材や執事会等によって  
知識を深め、課題を発見する

**企画  
デザイン**

企業と連携し、制作費をつくり  
プレゼンテーションする

**イベント開催  
反応調査**

ワークショップや展示の開催  
反応調査をフィードバックする

**課題発見**

衣類は、毎日身につける必需品であり、流行や  
気候変化によって、多くの人が大量に保有している。  
5年先のアパレル市場では、空室や廃棄物の  
多いメタファッションが急増している。衣類の  
ライフサイクルを長く保つことは、環境にやさ  
しいことである。衣類のライフサイクルを  
長く保つことは、環境にやさしいことである。  
日頃から社会問題やファッションなどを学  
ぶ学生がこういった取り組みについて知り、身  
近な存在にするための方法を考え実践すること  
によって、リサイクル可能な「持続可能な」消費  
への意識を高めていきたい。

人と人の関係性  
を重視し、環境に  
やさしい衣類を  
提案する。また、  
環境にやさしい  
衣類のライフサイ  
クルを長く保つ  
ことについて、  
学生が主体的に  
取り組むことが  
重要である。

企業と連携し、  
制作費をつくり  
プレゼンテーシ  
ョンをする。

ワークショップ  
や展示の開催  
反応調査をフィ  
ードバックする。

**京女 × クラボウ**  
[Loop PLUS] を活用した商品提案

京女の学生が、環境にやさしい衣類を提案する。また、環境にやさしい衣類のライフサイクルを長く保つことについて、学生が主体的に取り組むことが重要である。

京女 × KUROFINE (株式会社 京都府)  
「黒く染め替えるアップサイクル」  
ワークショップの企画

京女 × KUROFINE (株式会社 京都府)  
「白染のアップサイクル」提案作品

<今後の展望>

- 本発表では、生活造形学科でファッション領域を専攻する学生はデザインや製作を担い、現代社会学科で社会学や社会学科について学ぶ学生は環境イベント企画等を担当するなど、学科を超えたメンバーが集まることにより、連携した活動ができるようになっている。その一方で、企業や学生グループを介して学生の活動の場が広がることが課題となっている。
- イベントや展示等を通じて、商品に直接関わり、取り組みを学んでもらうべく、広く発信していきたいと考えている。活動の場を広げ、学生主体の活動の場を確保し、今後の活動に繋げていきたい。

## 8. 京都府立大学

テーマ	地域特性(産業構造・地域ニーズ)を考慮した授業デザインと成果 ～京都と熊本それぞれの地域特性に合わせた授業とその成果～	
発表代表者	前田 武司: 京都府立大学 キャリアサポートセンター 特任准教授	
連名発表者	藤田 崇: 崇城大学 非常勤講師 キャリアコンサルタント 田上 寛美: 崇城大学 非常勤講師 キャリアコンサルタント 辻田 祐純: 崇城大学 総合教育センター 教授 松村 千鶴: 京都府立大学 キャリアサポートセンター 特任教授	
キーワード	地域特性	産学連携
	成果の確認	リアルな就職活動
発表の概要	<p>京都府立大学、崇城大学とも「地元志向」の学生が多い大学である。しかし、両大学の立地する京都と熊本では地域産業の特性(産業構造や地域企業のニーズ)に差異がある。具体的には、京都は多くの電子部品や計測機器等のグローバルメーカーが本社を置いている地域であり、熊本は有力企業の工場や協力会社が数多く立地している地域である。</p> <p>両大学ともその特性を考慮してキャリア授業をデザインしてきた経緯があり、現在では一定の成果を出すに至っている。京都府立大学はBtoBとサプライチェーンの理解に重点を置いた3年次生対象授業「キャリアデザイン演習」を展開し、就職活動の活性化に結び付けている。崇城大学は学科の特性に結びつきやすい地元企業との共同に重点を置いた3年次生必修PBL科目「キャリア基礎Ⅲ」を展開し、学生の地域還流の「見える化」という成果に結び付けている。両大学の取り組みは、地元志向の学生と地域経済界双方のニーズに応えるものといえよう。</p>	

### 地域特性を考慮した授業デザインと成果

～熊本と京都それぞれの地域特性(産業構造・地域ニーズ)に合わせる～

#### 崇城大学 崇城大学の基幹キャリア教育の取り組み

地域特性: 若者の県外流出が多い、熊本地震の復興需要等で求人倍率は常に高い  
授業デザイン: 3年次生 必修 キャリア基礎Ⅲ: 県内企業が求める人材像を知る  
あるべき姿 1: 企業が求める人材に育つ 2: 仕事を理解した上で企業選びができる  
成果: 企業活動の理解向上、授業協力企業への応募者増加・内定獲得

学生の意見・成長・変化

- 売上下落、利益の長短もりなどが思ったより難しく、ビジネスの難しさが分かった
- 講義する際は、質問に対応できるように予備の準備が必要だと分かった
- プレゼンテーションでは、話し方・パワーポイントの仕上げを工夫する必要があると感じた
- 広い視野を持って情報収集することが大切だと分かった
- データを用いて意見をまとめることの大切さが分かった
- グループワークでは役割分担の必要性や意思疎通の大切さを感じた
- 任された作業を責任をもって取り組み、最後までやり遂げることができた

#### 京都府立大学 京都府立大学キャリアサポートセンターの取り組み

地域特性: 電子部品・計測機器等グローバルBtoBメーカーが集積 ⇒ 京都・関西本社企業群に着目  
授業デザイン: 3年次生 選択 キャリアデザイン演習 BtoBとサプライチェーンを軸に産業構造と仕事理解を担う  
あるべき姿 1: 学生がわかりにくいBtoB企業に目を向ける 2: 就職活動に積極的な先頭集団ができる  
成果: 就職活動の活性化 授業協力企業への就職者増加

2015年からの伸び率

指標	2015年	2016年	2017年	2018年
キャリアデザイン演習参加者数	110	120	130	140
就職者数	10	15	20	25



9. 京都薬科大学

テーマ	ICTを活用した実験実習における学習支援の取り組み	
発表者	高尾 郁子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教	
連名発表者	高田 哲也: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 木村 徹: 京都薬科大学 学生実習支援センター 准教授 河野 享子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 平山 恵津子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助教 大谷 有佳: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助手 千原 佳子: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助手 徳山 友紀: 京都薬科大学 学生実習支援センター 助手 石川 誠司: 京都薬科大学 情報処理教育研究センター 講師 藤原 洋一: 京都薬科大学 学生実習支援センター 教授	
キーワード	実験実習	ICT
	タブレット端末 (iPad)	学習管理システム (LMS)
発表の概要	<p>実験実習はこれまで学んできた理論学習を、実験を通じて「知識」・「技能」・「態度」として総合的に修得する場であり、実習の質向上による教育効果は大きい。</p> <p>京都薬科大学では6年制薬学部1～3年次生(1学年約360名)に「物理」・「化学」・「生物」といった科学を基礎とする多様な領域の実験実習を実施している。実験実習は必修科目であり、約90名単位の学生を教員4名で指導する。</p> <p>このような大人数で実験を実施する環境下において、学生一人ひとりの実験パフォーマンスの向上を目指すには、ICTを活用した教育コンテンツの提示、また実施過程で得られる大量かつ多様な情報の収集と適切なフィードバックなどの学習支援が有効であると考えた。</p> <p>本発表では、実験実習における学習管理システム(LMS)やタブレット端末を利用した学習支援の実施事例を中心に、学生の反応や実施に伴う問題点について報告する。</p>	

**ICTを活用した実験実習における学習支援の取り組み**

◎ 高尾 郁子・高田 哲也・木村 徹・河野 享子・平山 恵津子・大谷 有佳・千原 佳子・徳山 友紀・石川 誠司・藤原 洋一 京都薬科大学 学生実習支援センター・情報処理教育研究センター

**■背景と目的**

大学の実験実習は約90名の受講生を必要とする集約的学習である。このような大規模な実習の組織化として、指導教員の多岐にわたる授業・指導の負担軽減が求められてきた。京都薬科大学の実験実習は実験・装置・装置の管理・メンテナンス・トラブルシューティングなど多岐にわたる内容があり、また実習中、作業の進捗が把握できず、その理解に遅れが生じた場合に気づくことが難しく、教員が受講生を個別に指導することが困難である。そこで、本発表では実験実習にICTを活用することで、実験パフォーマンスの向上と教員負担軽減の両方を達成することを目的とした。

**■実験実習におけるICTの活用事例と効果**

**学習管理システム(LMS)とタブレットの活用**

・実習で使用するLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**情報コンテンツ** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**実験データ** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**パフォーマンス評価** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**データの可視化** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**自己学習の促進** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**指導内容の進化** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

**即時フィードバックの実現** 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム 実験実習のLMS: Canvas LMS 学習管理システム

◎ iPadで授業した時、学生は授業で活用したiPadの活用状況が向上したか?

◎ iPadによる自己学習の活用状況が向上したか?

**■まとめと今後の展開**

◎ 実験実習にICTを活用することで、学生の実験パフォーマンスが向上し、教員の実験実習の負担も軽減された。今後も実験実習にICTを活用し、学生の学習支援と教員負担軽減の両方を達成する。

◎ 実験実習にICTを活用することで、学生の実験パフォーマンスが向上し、教員の実験実習の負担も軽減された。今後も実験実習にICTを活用し、学生の学習支援と教員負担軽減の両方を達成する。

京都薬科大学 第10回LMSフォーラム 2018年6月8日 京都薬科大学

## 10. 成安造形大学

テーマ	授業初回における学生の「教員選択行動」が大学生の受講姿勢に与える影響 —成安造形大学複数教員の並列開講型講義の事例から—	
発表代表者	濱中 倫秀：成安造形大学 芸術学部 共通教育センター 特任准教授	
キーワード	シラバス	選択行動
	学習意欲の向上	自己決定
発表の概要	シラバスには、授業に関する重要な情報が盛り込まれている一方で、学生は必ずしもそれを参考にして授業を選択・履修していない。そのギャップを埋める方法の1つとして、同科目を複数の教員が担当する授業の中で、受講したい教員を選択(自己決定)が出来るとしたら、初期設定の段階で高い期待感を持って受講し、結果的に学習意欲と学習効果両方の向上という結果が得られるのではないと考えた。結果はアンケートで9割以上の受講生が教員の選択行動が参加意欲の向上につながったと回答した。同時に発見された今後の課題も併せて発表する。	

### 授業初回における学生の「教員選択行動」が大学生の受講姿勢に与える影響 —成安造形大学複数教員の並列開講型講義の事例から—

濱中 倫秀 / 成安造形大学 芸術学部 共通教育センター



学生が・・・  
先生を選ぶ講義？

**Introduction | シラバスを読まずに履修している？  
意思なく履修しているため、参加意欲が低い！**

教員は、学生が何を学ぶか理解できるように安心してシラバスを書いている。しかし教員目線で分かれており、必ずしも学生にとって効果的な分岐になっていないと言えない現状のシラバスの構成は、講義のスタート段階で受講の価値が学生の中に内化しているとは言い難い現状がある。

⇒学生の受講動機・ニーズとのギャップをどう埋めるかが課題

**Purpose | 講義への期待感を高める動機付けを行う  
学習意欲・効果両方の向上を目指す！**

- ×シラバスをしっかりと読むことを徹底
- 教員が自分の講義で講義の目標を直接伝える

その上で・・・【仮説】

学生が「教員を自分で選択」すれば、結果的に「学習意欲・効果」が向上しないだろうか？

※これは共催の講義でも教員は自己選択が出来なかった

**Method | 教員選択行動  
最大2名まで、学生は教員を選ぶ！**

初回の講義では、担当する3人の教員が3クラスそれぞれに「自己紹介」「授業内容（進め方）」後20分ずつ説明した。

講義は3クラスで実施します。

1班 濱中 倫秀 担任

2班 濱中 倫秀 担任

3班 鏡井 担任

1班 濱中 倫秀 担任

2班 濱中 倫秀 担任

3班 鏡井 担任

初回の授業紹介の回を除いた1・4回を2つに分け、「2回で1セット」の講義とし、前半・後半と最大2名の教員の講義を受講可能とした

**授業内容（別途目標は同一で、本学オープンキャンパスが対象）**

- 濱中 / 保護者向け就職セミナーの企画立案
- 鏡井 / 高校生へのzoomを活用したインタビュー
- 濱中 / オープンキャンパス内で流すラジオ番組の企画立案

学生は当日配布されたGoogleフォームから第2希望までをエントリー。その結果をもとにクラスを編成し、翌週から講義がスタートした。

**Result | 92%の学生が学びの意欲につながった  
自己決定はモチベーションに相關する！**

「授業の教員選択」という自己決定は、学びの意欲につながりましたが？のアンケート結果は下記の通り。回答の傾向別にインタビューを実施した。



■学生へのインタビュー

**Aさん / 大きにつながったと回答**  
自分が選ぶ授業というだけで、自分の興味関心や目的に合った自分の得意なことで学ぶことができると感じるようになった。

**Bくん / つながったと回答**  
先生が講義で、30分を多く話しかけてくれたので、スクリーンショットにメモして、とても簡単に消化できました。

**Cくん / あまりつながりなかったと回答**  
3人中で1人も見えない（好き）という状況があった。個人別に決められるようなので、選択できなかった。

⇒新鮮さもあり、大多数が学習意欲の向上を感じた！

**Discussion | 初回が教員にはハードだが・・・  
自己選択・決定には意味がある！**

初回の講義は、教員としては同じ50分3教室を回って実施（2・3限連続のため都合も回帰する）するため、体力的にはハードであった。しかし、出席回数や総論の点数で見るのではなく、自らの選択・決定プロセスを導入することで、講義への期待感や意欲に一定の効果があった。

両班は100%出席 自己決定9%

**Future work | 7回でアウトプットはタイト？  
回数・教室のキヤバ等の改善が必要**

3つの課題

第1⇄第2希望者の調整

教室のキヤバチャイ

履修は振りへの対応

「第一希望は必ずかええる」という前提を守ると、履修に偏った場合に多すぎて教室に入らない、逆に少なすぎるという問題が出てくる。あまり作意的な調整はせず、公平性を保つ仕組みを充実させたい。

第24期卒業生（濱中倫秀） 本学オープンキャンパス 2019年3月3日 成安造形大学



## 11. 成安造形大学

テーマ	キャリア意識の向上を意図したオンライン高大連携 —大学生が高校生に Zoom でオンラインインタビュー—	
発表代表者	筒井 洋一:成安造形大学 芸術学部 非常勤講師	
連名発表者	渡邊 野子:京都市立銅駝美術工芸高等学校 美術工芸科教諭/企画推進部主任	
キーワード	オンライン高大連携	インタビュー
	Zoom	ブレイクアウトセッション
発表の概要	<p>キャリア教育において、過去・現在から将来像を描こうとするが、自己の過去の振り返りはかなり難しい。そこで、高校生による現在から将来のキャリアについての話を聞いて、大学生が、過去から現在までの強みを再発見して、将来に向かいやすくなると想定した。</p> <p>高校側は、芸術系大学生の姿を通じ、生徒が未来の自分について考え、キャリア意識が高まることと、大学生との対話により現在の自分を見つめ直すことを意図した。</p> <p>昨5月、成安造形大学「就業力育成演習 C」受講生が、銅駝美術工芸高校生に対して、無料の Web 会議ツール Zoom を活用してオンラインインタビューした。</p> <p>45分間に、大学生8名がグループに分かれ、高校生8名に同時にインタビューすることを可能にする、ブレイクアウトセッション機能を使った。</p> <p>大学生は高校生の話を傾聴後、大学生自身の高校から現在までの視点からコメントした。こうした対話によって、参加者は何を感じ、どのような変化があったのかについて報告する。</p>	

キャリア意識の向上を意図したオンライン高大連携  
—大学生が高校生に Zoom でオンラインインタビュー—

筒井洋一/成安造形大学非常勤講師、渡邊野子/京都市立銅駝美術工芸高等学校

オンライン高大連携がリアルを越えた!

45分間で12名の大学生と15名の高校生が8グループで個別インタビュー

1. 就職に不安な学生の自己肯定感を高める  
高校生のキャリアをインタビュー  
自分の過去から現在までの強み発見

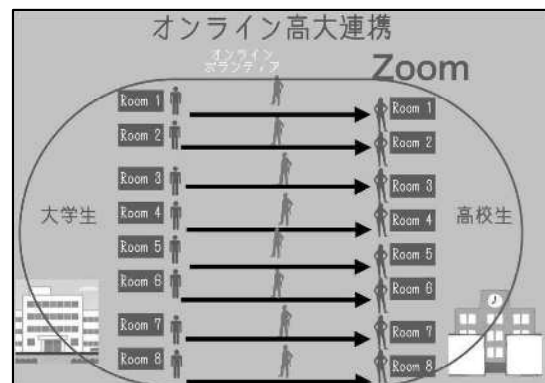
2. 日本初の Zoom オンライン高大連携  
Zoomの特徴  
100名同時接続、自分のデバイス、屋外  
参加者数 (5/22, 7/3)  
大学生 20名  
高校生 27名  
ボランティア 28名

3. オンライン高大連携が、リアルを越えた  
リアル高大連携の課題  
移動距離、時間、経費、トラブル  
Zoomの活用によって実現可能

4. 学校外からのオンライン・ボランティアの役割と意義  
ボランティア  
大学生 ↔ 高校生

5. Zoomオンライン高大連携が、リアルを越えた  
45分間で12名の大学生と15名の高校生が8グループで個別インタビューが実現

6 結論  
Zoomによって、オンライン高大連携は  
1. 実現可能  
2. ボランティアの参加で、社会に開く  
3. 大学生の反応  
高校生が将来についてアツク語り話していたので、自分も身が軽くなる! 高校時代に意大高望したことや思い出した  
4. 高校生の反応  
同じ美術で学ぶ先輩から、大学生活の様子を聞くことができて、自分の進路をイメージし考えることができました。



## 12. 同志社女子大学

テーマ	北海道富良野市における地域連携型学習を通したまちづくりの視点	
発表代表者	天野 太郎:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 教授	
連名発表者	東 美緒:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 3年生 北 秀美:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 4年生 谷 莉歩:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 4年生 山口 綾菜:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 4年生 池田 美優:同志社女子大学 現代社会学部社会システム学科 4年生	
キーワード	地域連携	持続可能な発展
	観光	まちづくり
発表の概要	<p>本学では 2006 年度より北海道富良野地域での地域学習を推進してきており、とくに 2015 年度より学まち連携推進事業として、先進的なまちづくりを持続的に学ぶ視点として、また京都のまちづくりとの対比に視点を置きながら地域連携を強化しつつ学習プログラムを展開してきている。今回の報告では、その一環として強化したプログラムの現状と課題について、実際に現地にて学習を行った学生と共同で報告を行う。</p>	

2018年度 京都市「学まち連携大学」促進事業採択事業 京町家を中核とした未来の京都まちづくりプログラム

### 北海道富良野市における地域連携型学習を通したまちづくりの視点

同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科  
東美緒・池田美優・北秀美・谷莉歩・山口綾菜(学生)・天野太郎(教員)

1:はじめに 報告の目的

本報告は、2006年度から本学で実施している地域連携型学習プログラム「富良野」を取り上げて、プログラムの現状とその特徴を報告する。また、地域連携型の教育プログラムとしての課題について報告を行うものである。

2:授業プログラムの概要

①地域連携型学習プログラム「プロジェクト学習」(PBL)「インターシブエ」は、地域に密着し、地域の課題解決のための実践的授業。毎年1月～2月の1泊2日、現地滞在を伴った学習。②発表発表は1年生以上、15名程度で実施

3:問題意識の変化

「私」を中心としたプログラム(2006年～2009年) 本学独自の教育プログラム「PBL」に特化  
観光地としての富良野 中富良野村 フェーム活用と連携して実施  
\*PBL研修、ラベンダー園視察、富良野の歴史を学ぶ

富良野の現状  
1:富良野市域の観光客数減少  
2:フェーム活用の受け入れ態勢の変化  
3:授業担当者の変化

2010年から、「富良野」から「まちづくり」・「地域対比」に中心テーマをシフト

③富良野の現状から、ラベンダー、フェーム・ワークショップ(北の園から)「園のガーデン」(ロケ地)、自然史(カムルー)、環境保護観光へと、ついに新しい視点を、積極的に生み出してきた富良野

④地域連携型学習が促進し、輝くことで、地域の魅力が増加し、その動きこそが地域の魅力となる

学生と地域住民が交流しながら 女子学生の視点からのまちづくりを学習・理想・発信!

4:2017-2018年度実施のプログラムの特質

①北海道富良野地域の形成について現地ではなびフィールドワークの実践  
②京都の事例から富良野のあり方を考える=京都 富良野の双方で地域対比を軸にした視座

③地域を学ぶ力=富良野の地域振興について、観光学・経済学・心理学・文化学・まちづくりなど複合領域からの地域理解のまなざし

④地域住民との信頼プログラム 北海道富良野経済高校(カレンジャー)地元の農産物の発掘プログラムに参画  
富良野オムカレ=地域の産物を活かした食文化発信・活性化プログラム  
地元の高校生が主体的に活動・農産物産物活用(10名)など注目される存在

⑤発信する力=中心市街地の活性化・まちづくりの課題  
→富良野の現状(10名)市街地から発信 市民との交流の場 地域活性化の発信を促すセミナー  
新聞・ラジオを通じた学びの発信

⑥京都の事例から富良野のあり方を考える=京都 富良野の双方で地域対比を軸にした視座  
京都の観光地への取り組み・インスタグラムを活用した観光など富良野に提案発信  
富良野の多世代型のまちづくりへの実践的な取り組み、今後の京都の中心市街地での実践へ  
「多世代」と「多地域」から学生が発信を促す

5:今後の可能性と課題

持続的な教育プログラムを継続していく上で、また地域と連携したプログラムを行う上で以下のような可能性と課題が課題として指摘できる。

①地域連携型学習の推進、住民の信頼  
教員個人の負担、ネットワークでの授業計画

②地域連携型学習への期待、継続的なメリットの提供  
滞在型学生との交流、発信、活動への参加を要請  
地域へのメリットを明確化

③富良野地域の学びや魅力を各学生に発信し、学生間のコミュニケーション、情報・関係性を高める存在  
一地域と大学、学生間関係における持続的な連携関係の構築

④京都のまちづくりへのフィールドワーク  
女子高齢化、人口減少が進行している富良野からの連携、京都へのフィールドワークへの実践

\*ご掲載いただいた記事がどうかございました。ご意見・ご感想いただければ幸いです。

### 13. 立命館大学

テーマ	課外自主活動でリーダーを担う学生の社会情動スキル ～実態把握および課外活動における困りごととの関連の探索的検討～
発表代表者	神庭 直子:立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス
連名発表者	一柳 晋也:立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス 課長補佐 加藤 慶彦:立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス 大田 桂一郎:立命館大学 教育学部 教務課 長田 勝:立命館大学 学生部 衣笠学生オフィス 課長 河井 亨:立命館大学 スポーツ健康科学部 准教授
キーワード	正課外活動 アセスメント コミュニケーション リーダー育成
発表の概要	立命館大学では、正課・課外の学生生活全体を通じて学生を育てる学生育成目標を定めており、課外自主活動支援や、課外自主活動における学生の成長の可視化に関して積極的な取り組みを継続している。今年度、支援の一環として行った「課外自主活動ガイダンス」において、次年度(2019年度)に課外自主活動のリーダーとなる学生を対象にアンケートを実施した。本発表では、その分析結果の一部を報告する。具体的には、コミュニケーションスキルや協働意識に関する実態把握を行うとともに、活動やクラブ運営・参加上の困りごととの有無との関連について探索的に分析を行い、今後の学生支援やアセスメントの展開可能性について検討する。

## 課外自主活動でリーダーを担う学生の社会情動スキル 実態把握および課外活動における困りごととの関連の探索的検討

神庭 直子<sup>1</sup>・一柳 晋也<sup>1</sup>・加藤 慶彦<sup>1</sup>・大田 桂一郎<sup>2</sup>・長田 勝<sup>1</sup>・河井 亨<sup>3</sup>  
<sup>1</sup>立命館大学学生部 <sup>2</sup>立命館大学教育学部 <sup>3</sup>立命館大学スポーツ健康科学部

**研究背景**  
 学びの立命館モデル：学生生活全体を通じた学生の成長  
 ✓ 生涯と輝ける学生生活全体を通じた「学生を育てる」学生育成目標  
 ✓ 学生の多様な課外活動（クラブ・サークル活動、ピア・サポート活動）への参加（・・・約430団体、学生数の65.7%が参加（2017年度））  
 ✓ 2018年度より、課外活動における成長支援プロジェクトを実施

**課外活動を通じた学生の成長**  
 ✓ 学内の成長に加え、組織との関係での「仲間づくり」、社会との関係での「社会貢献」、自分との関係での「人間的成長」がある（河井, 2014）  
 ✓ 成長を促進するために「L・D・S（学びの力）」、「個人としての可能性」、「チャレンジ精神」がある（河井, 2015）

本研究では「社会的成長」と関連して、人間関係やコミュニケーションに注目する

**目的**  
 ✓ 課外自主活動のリーダーを担う学生を対象とし、課外活動を通して「コミュニケーション能力」が、どのように関連しているのかを「社会的成長」を軸として、その関係を探る  
 ✓ 社会情動スキルと課外活動での困りごととの関係について、探索的に検討する

**方法**  
**調査対象と調査時期** 2018年12月に実施された課外自主活動ガイダンスに参加した学生を対象とし、ガイダンス終了後Web調査としてアンケートを実施した。  
**分析対象者** ガイダンス参加者のうち今年度（2018年度）に課外自主活動のリーダーとなる学生405名（男性274名(67.6%)、女性131名(32.4%)）、1課外活動参加者（2018年度）324名(79.9%)、2課外活動参加者（2018年度）81名(20.1%)の合計486名を対象とした。  
**倫理的配慮** 本調査への参加はガイダンスで説明を兼ねていたため、説明を行った。その際、調査目的について説明を行った上で、匿名性が保証され、個人情報が漏れることは一切ないこと、アンケートの回答が本人が希望するよう統計的に処理することやWeb調査結果を公開しないこと、1. 同意を得た上で実施した。

**調査内容**  
**調査項目** 自信、責任、協力、学業、社会  
**社会情動スキル尺度**（河井, 2017）  
 ✓ 自信、責任、協力  
 ✓ 学業、責任、協力  
 ✓ 社会情動スキル尺度の信度（Cronbach's α）は0.85であった。  
**課外活動に関する困りごと** クラブ活動、サークル活動、ボランティア活動、学生部活動、学生生活全般に関する困りごとを10項目に分類し、その関係を探る

---

### 結果

**1. 社会情動スキルの到達状況**

- ✓ 男子学生による男子学生の到達、女子学生による女子学生の到達の差が大きい
- ✓ 社会情動スキルの高下は調査項目により異なる傾向が見られる
- ✓ 男子学生は、責任、協力、学業、社会、自信の5項目で高得点であった

**2. 社会情動スキルと課外活動における困りごととの関連**

- ✓ 課外活動に悩む困りごととの関連は、社会情動スキルが高いほど、悩む困りごとの頻度が低い傾向が見られる
- ✓ 悩む困りごとと社会情動スキルとの関連は、社会情動スキルが高いほど、悩む困りごとの頻度が低い傾向が見られる

**3. 社会情動スキルと課外活動における困りごととの関連**

社会情動スキルと課外活動における困りごととの関連は、社会情動スキルが高いほど、悩む困りごとの頻度が低い傾向が見られる

**考察**  
 コミュニケーションに関する高い自己効力感を活かしたリーダーシップへ  
 課外活動のリーダーとなる学生は、社会情動スキルにおいて高い自己効力感を活かしたリーダーシップを発揮していることが確認された。この結果は、社会情動スキルと課外活動のリーダーシップとの関係を探る上で重要な示唆を与えていると考えられる。今後の研究では、社会情動スキルと課外活動のリーダーシップとの関係について、より詳細な検討を行う必要がある。

**アセスメントに関する課題**  
 本調査では、信頼性・妥当性が確認された社会情動スキル尺度を用いて、社会情動スキルを測定した。しかし、社会情動スキルと課外活動のリーダーシップとの関係について、より詳細な検討を行う必要がある。今後の研究では、社会情動スキルと課外活動のリーダーシップとの関係について、より詳細な検討を行う必要がある。

学生の一人の成長を促す  
課外活動支援へ

ポスターセッション

## 14. 立命館大学

テーマ	多文化間共修 Cross Cultural Encounters の教育実践 —他者との出会いから創造する学び、二言語アプローチの意義—	
発表代表者	羽谷 沙織:立命館大学 国際教育推進機構 准教授	
連名発表者	石川 涼子:立命館大学 国際教育推進機構 准教授 カンダボダ P.B.:立命館大学 国際教育推進機構 准教授 筆内 美砂:立命館大学 国際教育推進機構 嘱託講師 堀江 未来:立命館大学 国際教育推進機構 教授 村山 かなえ:立命館大学 国際教育推進機構 嘱託講師 リム・クリスティーナ:立命館大学 国際教育推進機構 嘱託講師	
キーワード	多文化間共修	Cross Cultural Encounters
	他者との出会いから創造する学び	二言語アプローチ
発表の概要	立命館大学では、学部の垣根を超えた全学共通の教養科目として、グローバル社会を構築する上で欠かせない異文化相互理解を促す科目群(教養科目B群)を提供している。この中から特に、国際学生と国内学生が互いに学びあうことを目的とした科目 Cross Cultural Encounters(以下、CCE)を取り上げ、その教育実践について報告する。まず、スーパーグローバル大学創成支援事業と関わって、本学のグローバル人材育成施策における教養科目 B 群の理念や意義を明らかにする。次に、履修数の推移、国際学生と国内学生の割合、所属学部などのデータを示した上で、CCE の授業設計、シラバスの内容、達成目標を紹介する。最後に、CCE における教授法の工夫(日英二言語使用やコミュニケーションの促進方法)を検討するとともに、学生のコメントを踏まえ、多文化間共修における成果および学生の戸惑いや課題についても考察する。	

### 多文化間共修 Cross Cultural Encounters の教育実践 —他者との出会いから創造する学び、二言語アプローチの意義—

立命館大学 国際教育推進機構  
羽谷沙織、石川涼子、カンダボダ P.B.、筆内美砂、堀江未来、村山かなえ、リム・クリスティーナ

#### 1. はじめに

1987年、文部科学省の「国際学生10万人計画」の始まり、外国人留学生受け入れの量が増え続け、その後、2009年になると外国人留学生受入数目標は10万人へと拡大し、日本から海外への留学促進や文化交流政策なども重要視されるようになった。2014年度に始まったスーパーグローバル大学創成支援事業(SGUP)は、大学の国際化を促す政策的な取組であり、この機会を捉え、本学が取り組むべきである。

2023年までの立命館大学の教養科目  
 ◎外国人受入人数(学生数:2021年度までに4,950人  
 (2018年5月)目標は約4,000人)  
 ◎派遣留学生数:2,000人(2018年度:2,185人)

しかし、これまで教養科目を履修したとしても、異文化との出会いを通じた学びの機会を得る学生は限定的。

より多くの学生を対象に、キャンパスでの多文化間共修の機会を提供する必要性

立命館大学の教養科目として2010年度に Cross-Cultural Encounters(以下CCE)を新設。担当教員数(2022年度現在):7名

#### 3. 科目数および受講生の状況

科目名	2017年度	2020年度	2022年度(2021年度科目) (人)
語学科目	6	10	252
経済学科目	182	312	61
国際学科目	50	73	33
国際学科目	27.5%	23.4%	5
その他科目			1
計			9
国際学生			52

2022年度CCE受講生(学部・研究科別)		(人)
スポーツ健康科学部	8	9
経済学部	17	10
法学部	4	6
経営学部	4	27
経営学部	40	3
経済学部	16	73
国際学部	40	0
国際学部	1	15
国際学部	24	6
経営学部	12	312

#### 2. 「多文化間共修」の定義に基づいたCCEの意義

①学内の文化的多様性を活かした学び合い:  
国内・国際学生がもたらす文化的多様性を学習リソースとして活かすことで、相互交流を通じた学び合いが生まれる。

②共通言語を通じた学び合い:  
一つの言語にとらわれないこと、受講生が学習している言語やお互いにつながる言語を配慮・工夫・使用することで、よりよいコミュニケーションと関係構築が促進される。

③体験学習の循環プロセスから育む学び合い:  
授業で体験したことや感じたことを意識的に振り返ること、新たな気づきや考え、課題を発見する学びの効果が生まれる。  
(坂本・堀江・未来, 2017)

#### 4. 教授法の工夫

- 話しやすい環境、安心安全な場作り
  - ウォームアップ/アイスブレイキングアクティビティ
  - お互いの期待や目的、コミュニケーションルールの共通認識構築
  - ペアワーク・グループワークの積極的な活用
  - Teaching Assistant (TA)の採用と連携
  - ビデオ・サポートの奨励と促進
- 二言語アプローチの活用
  - 状況に応じて使用言語を判断・相対・工夫することを奨励
  - 言語・非言語的要素を意識・工夫したコミュニケーション
- 学生への意識づけ
  - 傾聴 (Active Listening) を実践
  - Comfort zoneを飛び出して体験する意義
  - 体験と振り返りを通して学ぶ (Kolb, 1984)
  - 驚きや戸惑いや、個人の心的反応への気づき
  - コメントヘッパ、リフレクションヘッパの活用と共有

#### 5. 育まれた学び

- 自己表現能力・間違いを恐れず、伝えようとする意欲とスキル向上
- チーム・ビルディング力
- 問題解決能力や対人協働能力
- 多様性への気づきと関心(困難や言語に陥らない)

#### 6. 課題

- ▶ 多様な言語運用能力やグループダイナミクスに対応する教員のスキル
- ▶ 授業と前学の接合
- ▶ 教養科目の上級クラスの継続履修のすすめ
- ▶ 公開授業等を通しての全学への発信
- ▶ 履修者選抜方法



## 15. 立命館大学

テーマ	国際系ピア・サポーターによる実践とコミュニティ形成：多様な学びの環境と繋がり の構築へ向けて	
発表代表者	村山 かなえ：立命館大学 国際教育推進機構 国際教育担当 嘱託講師	
連名発表者	藤原 由衣：立命館大学総合心理学部 2 回生／OIC TISA 代表 小西 澄佳：立命館大学総合心理学部 2 回生／OIC TISA 副代表 小林 優太：立命館大学政策科学部 1 回生／OIC TISA 副代表 岡鼻 惇生：立命館大学総合心理学部 3 回生／OIC まいる 代表 巽 晃和：立命館大学政策科学部 3 回生／OIC まいる 副代表／SUP! OIC 副代表 福田 彩乃：立命館大学経営学部 3 回生／SBJP バディ リーダー 武井 風太：立命館大学経営学部 3 回生／OIC インターナショナルハウスレジデント・ メンター(RM) 長谷 菜由子：立命館大学経営学部 3 回生／OIC BBP マネジメントスタッフリーダー	
キーワード	大学生によるピア・サポート	国際交流・国際理解
	日本の大学におけるグローバルコモンズ	正課外活動での学び
発表の概要	本発表では、大学内で国際交流を行う学生団体の活動実践を踏まえ、多様な学び が育まれるコミュニティの形成は、いかにして起こるのか、その一例を考察する。特 に、2015 年に開設された立命館大学大阪いばらきキャンパス(OIC)に所属する各学 生団体(立命館大学正規留学生へのサポート団体「TISA」、立命館大学生への海外 留学サポート団体「まいる」、外国語学習サポート団体「SUP!」、短期留学生受入プ ログラム参加学生へのサポート団体「SBJP バディ」、国際寮入寮学生のためのサポート 学生グループ「インターナショナルハウス レジデント・メンター」、グローバルコモンズの 運営団体「BBP マネジメントスタッフ」)の活動事例を取り上げ、正課外活動での多様 な他者との学びの様子を概括し、各団体間の連携構築についても触れると共に、日 本の大学で行われる国際交流・国際理解活動とピア・サポートの意義を議論したい。	

立命館大学 2018年度国際化推進フォーラム 2018年11月14日(水)立命館大学 国際系ピア・サポーターによる実践とコミュニティ形成：多様な学びの環境と繋がり  
の構築へ向けて

国際系ピア・サポーターによる実践とコミュニティ形成：多様な学びの環境と繋がり  
の構築へ向けて

立命館大学 OIC TISA 代表 藤原 由衣 OIC まいる 副代表 岡鼻 惇生  
国際系ピア・サポーター OIC TISA 副代表 小西 澄佳 SBJP バディ リーダー 福田 彩乃  
OIC TISA 副代表 小林 優太 OIC インターナショナルハウスレジデント・メンター 武井 風太  
村山 かなえ OIC まいる 代表 岡鼻 惇生 OIC BBP マネジメントスタッフ リーダー 長谷 菜由子

3. 今後の発展内容  
日本の大学内で国際交流を行う学生団体の活動実践を踏まえ、多様な学びが育まれるコミュニティの形成は、いかにして起こるのか、その一例を考察する。特に、2015年に開設された立命館大学大阪いばらきキャンパス(OIC)に所属する各学生団体(立命館大学正規留学生へのサポート団体「TISA」、立命館大学生への海外留学サポート団体「まいる」、外国語学習サポート団体「SUP!」、短期留学生受入プログラム参加学生へのサポート団体「SBJP バディ」、国際寮入寮学生のためのサポート学生グループ「インターナショナルハウス レジデント・メンター」、グローバルコモンズの運営団体「BBP マネジメントスタッフ」)の活動事例を取り上げ、正課外活動での多様な他者との学びの様子を概括し、各団体間の連携構築についても触れると共に、日本の大学で行われる国際交流・国際理解活動とピア・サポートの意義を議論したい。

2. 国際系学生グループ 概要：立命館大学大阪いばらきキャンパス(OIC)

**TISA**  
OIC 国際系ピア・サポーターのサポート  
・ 在学・卒業支援(授業・検定対策)  
・ 生活支援(生活費・アルバイト)  
・ メンター(体験談)  
・ 国際交流(交換留学)  
・ 就職支援(インターンシップ)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

**インターナショナルハウス  
レジデント・メンター (RM)**  
立命館大学 国際系学生への支援  
・ 生活支援  
・ 生活支援(体験談)  
・ 入寮支援(生活費・アルバイト)  
・ 国際交流(交換留学)  
・ メンター(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

**SBJP/バディ**  
短期留学生受入プログラム(Buddy of  
Study)のサポート  
・ 生活支援  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

**SUP!**  
OIC 国際系学生への支援  
・ Language Exchange Program (LEP)  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

**まいる**  
立命館大学への海外留学支援  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

**OIC BBP マネジメントスタッフ** 立命館大学 グローバル・コモンズ (Beyond Borders Plaza) 運営  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート

3. 国際系学生グループ つながりの形成 2017年度から現在まで

4. 発展・今後の展望  
・ 生活支援(体験談)  
・ 生活支援(体験談)  
→ OIC 国際系学生へのサポート



## 16. 龍谷大学

テーマ	Community Based Learning による成果と課題 —学生と地域の変化に着目して—	
発表代表者	村田 和代:龍谷大学 政策学部 教授	
連名発表者	久保 友美:龍谷大学 地域公共人材・政策開発リサーチセンター 博士研究員	
キーワード	Community Based Learning	アクティブ・ラーニング
	域学連携	人材育成
発表の概要	<p>京都では地域で活躍する人材の育成を目的とした「地域公共政策士」の開発・運用を2011年度から推進してきた。「地域公共政策士」の特徴は、アクティブ・ラーニングである。大学と地域との組織的な連携によって教育プログラムが提供されている。そのプログラムをCommunity Based Learning(CBL)と呼ぶ。CBLとは、大学／地域連携の先進地であるポートランド州立大学で長年にわたって、全学的に取り組まれている実践的教育である。</p> <p>龍谷大学では、複数の地域と連携を図りながら、CBL を展開している。今年度はその現状を把握すべくアンケート調査を行った。発表では、そこから見えた成果と課題について触れ、CBL によって学生と地域にどのような変化が生まれたのかについて考察する。</p>	


**Community Based Learningによる成果と課題**  
**—学生と地域の変化に着目して—**

**村田和代（龍谷大学）**  
**久保友美（龍谷大学）**

1. CBL (Community Based Learning: 地域連携型学習) とは  
 地域を学びのフィールドとして考えるのではなく、**学習者も当該コミュニティの人々とともに課題解決に関わる学び合いコミュニティ**をめざす教育プログラムである。大学／地域連携の先進地である**ポートランド州立大学**で長年にわたって、**全学的**に取り組まれている実践的教育である。

2. 具体的なCBLの取り組み

<b>福知山・守山プロジェクト</b>	話し合いがまちを変える！話し合いがまちを創る！市民の声を形にする！市民参加と協働のまちづくりを仕掛けるプロジェクト
<b>洲本プロジェクト</b>	グリーン&グリーン、ツーリズムの構築による洲本市の地域再生
<b>京丹後五十河プロジェクト</b>	聞き書きによる五十河地域の魅力再発見と内発的地域再生
<b>亀岡プロジェクト</b>	亀岡カーボンマイナスプロジェクトを軸とした食育・環境教育プログラム開発と地域再生
<b>京丹後防災プロジェクト</b>	防災地域デザイン-防災を通じた安全、安心で魅力的な地域づくりの展開
<b>伏見CBL 演習</b>	「伏見ふれあいプラザ」企画・運営を中心とした地域交流・活習



3. 大学・地域の変化

① <b>地域での連携ノウハウの蓄積</b>	連携マッチングの増加、各地域からの要望、課題依頼、地域への反応
② <b>協定・覚書の締結</b>	組織的かつ恒常的な関係性の構築
③ <b>学生団体の立ち上げ</b>	プログラム終了後も関わり続けることのできる仕組み
④ <b>学生のキャリア形成への寄与</b>	リターン・リターン就職、大学院進学

4. 課題

① <b>適正な受講規模</b>	教員1名、スタッフ1名の場合、受講者20名程度が理想
② <b>恒常的な予算</b>	学生の移動経費、スタッフ人件費
③ <b>他の活動主体への広がり</b>	高大連携、小学校との連携、大学間連携

## 17. 公益財団法人大学コンソーシアム京都

テーマ	生涯学習事業「京(みやこ)カレッジ」の紹介 ～京都学講座・大学ルー講座を中心に～	
発表者	馬渡 明:公益財団法人大学コンソーシアム京都 副事務局長/教育事業部 次長	
キーワード	大学正規科目への市民受講の促進	市民の京都力や地域力の養成
	加盟校の生涯学習事業の紹介	今後のリカレント教育の促進
発表の概要	本財団では京都市と連携して、市民に向けて加盟校他の正規科目と生涯学習講座を270科目以上提供し、のべ約1,300名が学ぶ「京(みやこ)カレッジ」を通して、市民の様々な「学び」の促進に取り組んでいる。その事業について、京都力養成コース講座として人気の高い「京都学講座」や、各加盟校の生涯学習事業を紹介する大学ルー講座を含めて現在の事業全体の紹介をし、また本財団が2019年度から開始する第5ステージプランにおけるリカレント教育の促進方針についても触れたい。	



**2019年度 生涯学習講座 京カレッジ 募集**

「大学のまち京都」が学びのキャンパス

大学 講座 大学の正規科目と生涯学習講座の両方を履修可能

市民受講講座 歴史・文化、芸術、健康、経済経営など多岐にわたる

京都力養成コース 京都の魅力を学ぶ市民受講講座

出講日情報

3月6日(水)～20日(水)

3月19日(水)～24日(水)

受付時間 10:00～16:00

お申し込み方法

お申し込みは「京カレッジ」のホームページから可能です。

お申し込み先

公益財団法人大学コンソーシアム京都 京カレッジ部

〒600-8302 京都市中京区錦町5-1-1

TEL: 075-353-9140 FAX: 075-353-9121

http://www.consortium.or.jp/



**2019年度 生涯学習講座 大学ルー講座 募集**

「大学のまち京都」が学びのキャンパス

大学 講座 大学の正規科目と生涯学習講座の両方を履修可能

市民受講講座 歴史・文化、芸術、健康、経済経営など多岐にわたる

京都力養成コース 京都の魅力を学ぶ市民受講講座

出講日情報

3月6日(水)～20日(水)

3月19日(水)～24日(水)

受付時間 10:00～16:00

お申し込み方法

お申し込みは「京カレッジ」のホームページから可能です。

お申し込み先

公益財団法人大学コンソーシアム京都 京カレッジ部

〒600-8302 京都市中京区錦町5-1-1

TEL: 075-353-9140 FAX: 075-353-9121

http://www.consortium.or.jp/



**京カレッジ 京の伝統と先端**

「大学のまち京都」が学びのキャンパス

大学 講座 大学の正規科目と生涯学習講座の両方を履修可能

市民受講講座 歴史・文化、芸術、健康、経済経営など多岐にわたる

京都力養成コース 京都の魅力を学ぶ市民受講講座

出講日情報

3月6日(水)～20日(水)

3月19日(水)～24日(水)

受付時間 10:00～16:00

お申し込み方法

お申し込みは「京カレッジ」のホームページから可能です。

お申し込み先

公益財団法人大学コンソーシアム京都 京カレッジ部

〒600-8302 京都市中京区錦町5-1-1

TEL: 075-353-9140 FAX: 075-353-9121

http://www.consortium.or.jp/



**2019年度 京カレッジ 京都力養成コース 京都学講座**

「大学のまち京都」が学びのキャンパス

大学 講座 大学の正規科目と生涯学習講座の両方を履修可能

市民受講講座 歴史・文化、芸術、健康、経済経営など多岐にわたる

京都力養成コース 京都の魅力を学ぶ市民受講講座

出講日情報

3月6日(水)～20日(水)

3月19日(水)～24日(水)

受付時間 10:00～16:00

お申し込み方法

お申し込みは「京カレッジ」のホームページから可能です。

お申し込み先

公益財団法人大学コンソーシアム京都 京カレッジ部

〒600-8302 京都市中京区錦町5-1-1

TEL: 075-353-9140 FAX: 075-353-9121

http://www.consortium.or.jp/